



## ひとりっ子

またはひとりっ子の親

谷 田 関 次

ひとりっ子は、ひとりっ子であるということだけですでに病気である、などという発言ほど、ひとりっ子の親をぎよっとさせられるものはない。そしてそれはひとりっ子の親は有罪であると宣告するにひとしいのだから、ぎよっとしたあとで、意気沮喪する人も多いにちがいない。

私も、まぎよっとし、多少意気沮喪し、しかしそのあとで若干の反撥を感じたひとりっ子の親である。そしてうちのひとりっ子はいかにもひとりっ子らしいひとりっ子である。親は世話をやきすぎるし、当人は十分わがままだし、誰でも自分のために世話をやいてくれると思っっているし、さ

そいに来た友だちを待たせたり、自分の好きな遊びを強いたりすることは平気だし、いろいろな条件は揃っている。

幼稚園へ行きはじめたころ、友だち連中が遊んでいるのをにこにこして眺めているだけで、仲間に入ろうとしない。しかし別に仲間はずれというのではなく、傍観していることが結構楽しいのである。先生とお話しをするまでもない分長い期間がかかったらしい。そのころある名刺の中に住んでいたのも、ああいう静かなところで育っているとこういうものでしょうかと先生が洩らしておられたということを後に聞いた。

同じ幼稚園にもう一人たいへんのんびりした子がいて、帰りに下駄箱のところまで一番あとまでぼつんと立っている。迎えに来ているお母さんが、「見てごらんなさい、今に靴が自分の前へ出て来ると思っただけで待っているんですよ」と笑っていた。やはりひとりっ子である。

こういうひとりっ子の親たる者は、有罪の判決に服さなければならぬらしいのだが、しかし少し気がかりなこともある。

私自身はひとりっ子ではないが、小人数の兄弟で、しかも末っ子であったから、多分にひとりっ子の要素もあつたようだ。そのせいも、あるいは単なる親馬鹿にすぎないのかはよくわからないが、いずれにしても、ひとりっ子の精神状態にはかなり同情的である。

私の子どものころ、友だちに兄弟の大勢ある子がいて、これは何しろその中で訓練されているものだから、万事すばしい。今でも妙に印象的に憶えていることが一つある。それはその子を交えて四、五人で別のある友達の家へ遊びに行っていた時のことで、その家のお母さんがおほぎをたくさんつくってもてなしてくれた。今から思うと春か秋かのお彼岸のころだったかもしれない。子どもたちの中に一人年かきなのがないで、大皿から一人ひとりに分けたが何でもうまく分けられない数で一つか二つ残った。それはそのままにして、皆で分けてもらったのをご馳走になった。そこへお母さんがあらわれて、よかったら誰かおあがりなさいと言や否や、例のすばしい子が

電光石火手を伸ばしたのである。私は子ども心に何とも言えない印象をうけたことを今だにはっきり記憶している。いかにも平素の訓練を思わせるようなすばしこさであった。

ひとりっ子にはそういう訓練をうける機会はない。そして人為的にそういう訓練の場においてみようかというような気持ちは私にはない。多分そういう訓練を経ている方が、さきざき人を押し分けて電車に乗ったり、学校に入ったたりすることは上手であろうが。

靴が自分の前に来るだろうと思って待っている子どものことを書いたが、これは私はいい話だと思っている。利己的なおとなが、それを、他人の奉仕を期待しているなどと解するから話はいけなくなるので、子どもは靴の善意を信じているのである。靴の善意を信じ、靴の善意を信じ、もちろん人の善意を信じることは何にもましてよいことだ。人が己れに対して善意しかいだいていないと信じること、これは、おとなに

なればいやでも何度でも壁にぶつかる。そしていやでもその考えを訂正しなければならなくなる。しかしその後になっても、或る人々は、やはり人の善意だけを信じていられた時の方が幸せであったと考える。利口になったということと幸せであるということとは必ずしも両立はしない。少なくとも信じている間、人の善意を信じることは幸せである。そして人の善意を信じることから出発しないで、どうして己れが人に対して善意を持ちうるであろうか。

ひとりっ子が、自分を人々の善意によってとりまかれていると感じていることは大事なことである。そして成人してからも、人の善意によって鼓舞されて生きること、は、人の悪意に反撥して生きるより何と望ましいことではないだろうか。

ひとりっ子が、それでもだんだん友だちを持つようになって来て、親はいくつかの問題に逢着した。その一つ、そして象徴的なあらわれという気がしたのはことばづかいのことである。親たちは別だん上品めか

したことばづかいをしているわけではないが、まあ普通である。ところが居まわりの子どもたちはわざとのようにひどく荒っぽいことばづかいが得意である。横浜の田舎に住んでいたせいもあって、例の「何々がさあ、何とかでよう」という調子の子ども版である。これには少なからず弱った。

家で子どものつかうことばと、友だち同志のつきあいのことばとは全く別ものになってしまふ。こんなときに兄弟でもあると、多少はクッション的な役目をしたかもしれないなどと思う。そういうことがないから、家で少しやかましく言うとなら、子どもは内外で使いわけをしなければならなくなる。

だが様子を見ているうちに、荒っぽいことばは子どもたちのいわば仲間意識の支えであり、手形であることに遅まきながら気がついた。ひとりっ子はこの手形を手に入れると、目立って積極的になり、活発にふるまうようになったのである。こうなればひとりっ子の親は傍観するほかはない。式亭三馬が「はなたらしのころの悪たい口が

嫁入りどきまでついてまわるものじゃあなし」と言っているのはもつともである。多分、時が、親にとつても子どもにとつてもこのようなことを、またもつといろいろなことを解決してくれるであろう。

ひとりっ子にとつての愛情の独占の欲望とその修正の問題は、幼児の時代よりももつと後まで尾をひくことであり、やはり時の助けの必要なものであろう。

シャルルルイ・フィリップの「小さき町にて」の中の、アリスという女の子をあつかった作品。姉や兄はあるのだが、しかし幼い子どもはこの子ひとり、可愛い、そしてなかなか利口な子である。しかしこの子は七つにもなっているが学校へも行かないし、外にも出ないで、家の中で母親につきつきりである。母親の膝にのせてもらえば何時間でもじっとしている。「注意力のすべてをあげて、自分に与えられた愛撫を味わおうとし、母親が頭に手をやると、彼女はひしひしと感ずるために、何ものも見まいとじっと眼を閉じる」のである。

(淀野隆三氏訳による)

だが弟が生まれる。母親は赤ん坊につききらなければならぬ。アリスは「あたい一番小っちゃい子になりたい、一番小っちゃい子になりたい」と叫ぶ。そしてついに失われた愛の悲しみのために死んでしまう。それは母親が自分から奪い取つて弟に与えたものへの復讐である。

この悲劇の過程の中で、母親はアリスに赤ん坊をよくよく見させてその可愛らしさを印象づけようとするのだが、アリスはそれには少しも動かされず、かえつて憎しみにかり立てられてしまう。もしアリスが赤ん坊の可愛さに動かされたならば、破局はやつて来ず、運命はもつと違ったものとなつたろう。しかしすでに自分の競争相手であると知つてしまった赤ん坊の可愛さ目ざめさせようとするのは多分無理な要求であつただろう。そうではなくて、アリスが自分自身の愛をそそぎうる他のもの、猫でも、犬でも、人形でも、そういうものを見出すことが出来たら？ その場合にも多分ことは別の運び方をしたのではないだろうか。

アリス自身の愛、それはとりもなおさず、彼女が母親から受け、そして将来も受けることを期待している愛情の模写にほかならないだろう。こうして、もし子どもが豊かに受けた愛情が、彼女が豊かにそそぐ愛情の原型となりうるものならば——こう考えることはひとりっ子の親のひとりよがりであろうか。

ツルゲーネフの獵人日記の中に、ページの野と題する一篇がある。暗い夜の河のふち、草原の闇の中に焰のゆらぐ焚火をかこんで、数人の子どもたちが放牧の馬の群の見張りをしながら話してあつている。いや話している子どももあれば黙っている子どももある。小さいけれどももう紙すき場で働いている働き者だが、水車小屋の夜にまざまざと見聞きした家魔や、荒れた堤の道や水藻の漂う沼の水面に出没する物の怪を心そこ信じ、おびえるイリュエーシヤやコースタヤ。話のおそろしさにであろう、蓆をかぶつて身をすくめて寝ころび、時たま蓆の下から亜麻色の髪をのぞかせるだけのワ

「ニヤ。不意に、けたたましい犬どもの叫びと乱れた馬のおびたらしい蹄の音。子どもひとりかやにわに飛び出して行く。やがて裸馬にまたがって駆け戻って来たパヴルーシヤは、狼が来たのだと思つたと平気な声で言う。この少年は「棒きれ一つもたず、夜中に、少しもためらうことなく、たったひとりで狼を目ざして馬を飛ばしたのだ。」

(佐々木彰氏訳文)

広野の夜の闇の底で、燃え上りまた衰える焚火にちらちらと照らし出される子どもたちの一人ひとり。そこにはやがて仄かな暁の光の中に、広野の中で生い立ちそれぞれ一人前の人間に育っていくだろう子どもたちの姿がしだいに見定められていく。

あの香気に満ちたツルゲーネフの作品を引きこにするのも気がひけるが、大事なのは個性であり、平均値や公約数ではない。そして個性とは選択の問題である。選択は同時に放棄の反面を持っている。或る木は白い花を咲かせ、他の木は赤い花をつける。私たちにすべてが可能でない以上、選ぶためには棄てなければならぬだろう。一

つの個性を育てあげるためには、棄てなければならぬものことは覚悟しなければならぬまい。パヴルーシヤは立派であるけれども、イリュエーシヤをそれにとりかえるわけにはいかない。

ひとりっ子の個性であろうとも、別のものをそれにとりかえたいとは思わない。

ひとりっ子の親のひそかな独り言である。

○

## 京子

今からざっと五〇年くらい前（大正三年）私の育った土地（東京）の幼稚園で、毎朝会集の時に、または組々のお室で、その頃の幼子達（現在は社会人として、それぞれ重要なポストで活躍したりまた母として、祖母として一家団欒の中心になっておられる方々）にうたわれていた歌のかず多くある中に、今もなおそのまま、うたいつづけられているものと、もう、すっかり忘

れられてしまった歌があります。何という事なしに、ふと、思いつくまにこの二つをほんの少々ならべてみました。

忘れられたうた（A）

おひさま

うぐいす

桃太郎

大きむ小さむ

たまき

一寸法師

など。

『たまき』は一クラス（三十人位）全部手をつないで、たいてい先頭は若い先生で、みんな一しょにうたいながら、だんだん円を小さくし、中央から逆に、うずまきをほどくように歩き、最後の二人が手をあげて、トンネルを作り、みんな、そこをくぐって、大きい円にもどる、とてもたのしい、あそび、のついた歌でした。

『桃太郎』『おひさま』ふたつとも簡単な動作が付き、ゆうぎと言っていました。

その他『汽笛いっせい』の曲にあわせて歌ったのに、次のようながありました。

からすが かあかあ ないている